

【就労支援の現状と課題】

がんは、我が国における死因のトップにもかかわらず、その医療をめぐる地域間で治療や取り組みに格差があります。この問題の解消に向けて、2006年にがん対策基本法が策定され、がん患者に携わる医師を初めとする医療従事者の育成、がん診療連携拠点病院の設置、がん患者への医療情報提供などの整備が推進されています。そして、第2期「がん対策推進基本計画」から、がん患者への就労支援が提唱されるようになりました。2人に1人ががんに罹患する現代、がん治療の躍進も目覚ましく「治療を継続し、がんとうまく付き合いながら、寿命を全うする」時代になっています。「働きながらかんの治療を行える」環境を提供するには、患者を取り巻く医療者と雇用者、産業医や社会保険労務士などの専門家との連携が不可欠となります。しかしながら、化学療法や手術、放射線療法の副作用などで体力が低下した状態にあるがん患者様が、継続して就労するための社会の受け入れにおいては、まだまだ多くの壁があります。多大な労力を費やしながらかん社会復帰を行っているがん患者様への理解は乏しく、退職を余儀なくされている現実があります。

今回は、がん患者様を代表し、白血病からの社会復帰を果たしたAさんに、ご自身の苦労した実体験を語って頂きました。Aさんの闘病から社会復帰までの就労支援に関するお話の主な柱は、退職と最終就職に立ちはだかった3つの壁でした。以下に、その内容をご紹介します。

【就労までの道のり】

Aさんは、34歳で白血病と診断され、PL病院で5カ月間にわたる抗がん剤治療の後に、骨髄移植を受けられました。体調も戻りつつあり、社会復帰を考えたときに、まず、第一の壁、「病気の前に働いていた職場への復職」にぶつかります。病気発症まで10年働いた職場であったため、皆さんに温かく迎えられる、そんな思いでの復職でした。リハビリ出勤から始まり、無休の出勤が続くというものでした。会社側からすれば、無理せずにゆっくりとといった思いであったのかもしれませんが。しかしながら、長続きはせず、遂には退職となりました。

第二の壁は「自分が持っている資格、技能を活用した別の場所への転職」です。ここでは、当院のぴーえるサロン（がん患者サロン）で紹介された社会保険労務士さんと色々な相談をされました。そんな時に、知り合いから物流関係への転職の話が舞い込んできました。

「一回やってみ、ゆっくりでいいよ」という社長さんの言葉を頼りに、転職されました。しかし、会社の期待とご自分の体力の格差に疲弊し、「期待に応じたくても、体力も気力も応えるレベルに達していなかった」と断念されました。

第三の壁は、「全く異なる職種への転職」でした。自分なら何が出来るのか。ハローワークに通ったら、「学校行ったら」と言われましたが、先立つもの、つまり資格を身に着ける

ための資金がありませんでした。人材派遣，パート職に応募もされました。しかし，履歴書から，「10年も働いて退職何て，何かあったのですか」と聞かれます。自分ががん患者であり，通院が必要でまだ完治していないことを告げると不採用になったということでした。

その後もハローワーク通いの毎日が続き，ついに念願の就職先が見つかりました。ある日，帰宅すると，郵便ポストに一通のはがきが投函されていたそうです。はがきは郵便局からで，職務内容は，軽4輪での小包配達でした。わらにもすがる思いで受けた面接では，不採用の原因となってきた病気のこと，通院が必要なこと，現在も病状は経過観察中の事を伝えたということです。そうすると，返ってきた答えは「今は，普通に生活出来るんですよ。じゃあ問題ないです。外来受診の日も言ってくれたら代わりに人を割り当てるし，病気やから何も出来ないって事はないです。一緒に頑張りましょ。郵便局は，いろんな方，いろんな個性の方がいるから大丈夫。」と言われたそうです。前職の配達経験と資格，土地勘が有ることも強みとなり，採用となりました。今も辞めずに続けていられるのは，一緒に働く方が助けてくれていること，上司の方々が，「現場が大変だって，体の事が一番。まずは，そこからやから。それを，疎かにしたら仕事も疎かになる。」と言ってもらえているからだそうです。

Aさんは，企業への期待を次のように述べられていました。「テレビではがんは働きながら治す時代と言っています，本当にそれが出来る会社がいくつあるのか，ごく一部に過ぎないと感じています。私たちは，「病」という荷物を背負って階段を上っていかなければなりません。人によって病気の重い，軽いはあると思います。そんな患者に平等に，上から手を差し伸べてくれる，一緒に登ってくれる，そんな企業が一つでも多くなることを切に願います。一方で，患者である私たちも頑張る必要があります。企業と患者とのズレを無くす事，患者の現状をどうか理解してほしいと思います。」

【おわりに】

このお話を聞いて，私たち医療者は，がん患者様の現場での真の苦労を理解し，社会保険労務士や産業医と協働し，雇い主の方へのアプローチを具体的に進めていかなければならないと，改めて実感させられました。上記の郵便局職員の言葉をどの職場でも普通に発して頂けるような社会になることを願うばかりです。今後もAさんのお話を広く，一般の方々にも聞いて頂き，がん患者さんの就労支援に関して，更なる取り組みを行っていきたいと考えております。